

## 平家物語における方言的語彙の一考察

——「これは馬場や」の解釈について——

井 上 章

## 第一章 序 論

数多い日本文学において、平家物語の一特色としてあげられるのは、ほとんど日本全国と言ってよい場面の広さである。

一体、日本文学で、作品中にいろいろな場所がとりあげられているものを数えあげれば際限のない事になるが、それぞれの所に住む、または生れ育った人との関係をもって述べられているものは少い。

旅をすれば、日ごろ経験しない事にふれて創作に清新な息吹が与えられるという。それだけ、異った場所の見聞は意義あるものときれる。ただ、その作品が純粹に叙景ででもない限り、それぞれの土地柄は、いわばモデルであって、必ずしも具体的「何処」が問題の中心ではなからう。それぞれの所に人間があり、それを含んで表現するとすれば、それらの人々の性格・生活態度・特異な能力などと土地柄を関連させて描いてこそ意義があると言うべきであろう。

そのような見方で平家物語に臨めば、明かに他作品と異った面が指摘される。即ち、当時の京都は、本来武家である平氏でさえも、天下をとるや否や忽ち華美の風に染まってしまふ程であった事と對比して、坂東（どの範圍を指すかは、今は特に問題にしない）の武士がいかに気骨があり、武力にすぐれ、戦術に長じていたかを述べていると言える。源平両氏のこの対照に妙味があると言つてよい。

今、保元物語・平治物語をとりあげると、同じく源・平が対立しても、東国と都の対比には至らない。後の太平記をみると、戦いの期間、たずさわった氏族などの規模は平家物語よりずっと広く、作品としての分量も多い。しかし、平家物語のような、都の平氏対東国源氏という照応はない。

では、平家物語に、東国のどんな場所がとりあげられているか。たとえば、頼朝の流されていた伊豆、義仲が育った木曾、源平正規同志の緒戦場たる富士川、北陸の決戦場としてのくりから谷などが、まずあげられる。

ただ、こう数えあげても、これまた、ここでかくかくの戦がかくの如く行なわれたというのが主で、その土地と人（この場合武士が中心であるのは当然としても）との結びつきを正面に据えて描写しているわけではない。では、側面的にせよ「土地と人」を、どんなふうに取りあげているか、まずそこから入って行こうと思う。

数多い登場人物について、その出身地と関連づけて考証することは今はできない。従って、ほんの目だつ例のみ示す事になるが、たとえば義経・義仲自身は言うまでもなく、その配下の兵どもが、どんな人物として描かれているか。まず義仲の手勢で言うと、手塚一族・倉光兄弟・樋口・義仲の愛妾巴、めのとの今井など、義経勢で言えば熊谷親子・佐々木一族・梶原一族・那須与一・佐藤兄弟・弁慶など、それ／＼に個性や特技をもちつつも、すぐれた剛の者として描かれている。

因みに、源氏勢、特に義経配下の兵どもは、氏族とその本拠地との関係が明確な人が多いようである。

ここで、両大将をみると、源氏戦勝の立役者はいうまでもなく義経であるが、作者は決して次第を整えて説明調に義経の生い立ちを述べてはいない。意外にも、屋島合戦の開戦に臨んで両軍の名乗りが崩れて口合戦となり、敵方の平氏（越中次郎兵衛盛嗣）のことは、

…とせ平治の合戦に、父うたれてみなし子にてありしが、鞍馬の児して、後にはこがね商人の所従になり、根料背負うて奥州へおちまどひし小冠者：

（巻十一「嗣信最期」の一節。大系本・下巻P 313）

のように素性を発かれる形で述べている。義経を傷つけぬ巧みな方法である。

義仲の描写にも似たところがあり、はじめ赫々たる戦果をあげつつ都へと快進撃しているうちには語らず、都に入って京人士と具体的に接するようになってから、今まで表面化しなかった「無教養な田舎武者」の一面を俄かにクローズアップする書き方をしている。その点で特に注意すべき事は、岩波大系本でも指摘しているように、この義仲の件を語る直前に、源氏の統領頼朝を登場させて、

…容貌悠美にして、言語分明也…（巻八「征夷將軍院宣」、大系本・下・P 138）と語り、それと対比して義仲に移っているのである。

…木曾の左馬頭、都の守護してありけるが、たちの振舞の無骨さ、物いふ詞つづきのかたくななることかぎりなし。ことわりかな、二歳より信濃国木曾といふ山里に三十まですみなれたりしかば、争かするべき。…（巻八・「猫間」、大系本・下・P 139）

この義仲のことばについては後に触れる事になるが、このように、平家の作者は、戦いの帰還を述べる中に、登場人物の種々な一面を織りまぜて語っているのである。

さて、配下の兵士らになると、事情はや、異なる。というのは、その人物の登場する所は概して限られている（何の場面に活躍するという焦点がある）から、その登場場面に即決型で描かねばならぬことになる。たとえば巻七で、斎藤別当実盛を討った義仲勢の手塚太郎光盛の活躍の場は「実盛」（巻七）、義経勢の那須与一の活躍の場は「那須与一」続く「弓流」の段（いずれも巻十一）という具合である。

このように主従それ／＼に語られる東国武士の、いわば質実剛健・野人的風貌を語るために、作者はどんな材料を用意したか？ これについても、作者は正面から説明することを避けて側面的に、むしろ

ろそれとなく自然に出てしまったかのように語っている所がある。前記した正規軍の緒戦「富士川」にのぞんで、平家の総大将維盛は東国源氏の子備知識を得んものと、もとは源氏方であつた実盛を呼んで説明させたのである。実盛の答は、

…さ候へば、君（維盛を指す）は実盛を大矢とおぼしめし候か。わずかに十三束こそ仕候へ。実盛程射候ものは、八ヶ国にいくらも候。大矢と申定もの、十五束におとつて引くは候はず。弓の強さもしたたかなる者五六人して張り候。かかる精兵どもが射候へば、鎧の二三領をもかさねて、たやすう射落し候也。…馬に乗つれば落つる道をしらず、悪所を馳すれども馬を倒さず。いくさは又、親も討たれよ、子もうたれよ、死ぬれば乗り越え乗り越えたたかふ候…。（巻五・大系本・上・P.372-373）

というもので、実盛が「かう申せば君を臆せさせ参らせんとて申には候はず」と注釈したのと裏腹に、正に平氏全軍を恐れさせ、夜間にとび立った水鳥の羽音に驚いて「聞逃げ」する結果につながるのである。

こういう東国武士の特徴ある一側面として作者の用意した材料が、彼らの「あづまことば・坂東声」という言語的特性である。

ただし、これについては既に言われているとおり、それ／＼の武士の出身地の方言を正確に描きわけけるのではなく、ただ大凡京都の詞とは異なつた（ほんの近郊ぐらいの差でもよい）ものを出すだけでも効果があると見てよい。その点は、現代、ラジオ・テレビ・舞台芸能・図書など、言語に方言色を出す場合も類似の事情がある。

即ち、それが広域を対象としたものであればある程、純粹・正確な方言を多く出す事は不可能になり、その特徴的なもので一般的に理解される表現だけを選択して用いざるを得なくなるのと同趣向であ

る。従つて、逆に言えば、局限された特定のどこの方言というより、東国全般に通じる代表的な特色があらわされていればよい事になる。その意味において、平家物語中に東国方言全般に通ずるような特徴をもつた語があらわれないかに注意を向ける必要がある。

## 第二章 本 論

### 第一節 方言的表現例

本論で問題にするのは源氏勢の東国方言であるが、他の面をごく簡単にとりあげてから入りたい。というのは、平家方にも方言的色彩の用語があり、また関西語の特色をもつたことばもあるからである。

たとえば、平家方でもや、格の低い「侍大将」の地位の「越中前司盛俊」のことばで、

「せんない殿原の鹿の射様かな。只今の矢一では敵十人はふせかんずるものを。罪つくりには、矢だうなに。」（巻九「坂落」・大系本・下・P.210）

とある。この「だうな」は既に言われているとおり、「損・無益・無駄」の意の東国方言的な語である。現在の分布から言えば長野・新潟・山梨・千葉の各県に類形が見出されたものである。ただし、平家物語の当時は、もつと広範囲に共通的に用いたかも知れず、決定的ではないが、たまく／＼彼の任国「越中」とはすぐ隣国の用語である事が、何か偶然以上のもものを感じさせる。

偶然かと言えはもう一人、「越中次郎兵衛盛嗣」も同じく「侍大将」の身分であるが、

「おなじくは大将軍の源九郎にくん給へ。…（巻十一・鶏合壇浦合戦・大系

本・下・P 330)

と言って居り、いわゆる「武者詞」に類するとは言え、東国的色彩のことはである。

このような平家方の関東方言的用語に対し、逆に源氏の関西的用語もある。たとえば、

御曹司城塚遙かに見わたいておはしけるが、「馬ども落いてみん」とて、鞍置馬を追ひ落す。(巻九・「坂落」、大系本・下・P 210)

とある。サ行四段のイ音便は、現在関西系表現の一特色とされているものである。これも穿すつて考えれば、義経は幼時都に育つたから京ことばを身につけているのだとか、義経をば、よく見なそうとする描写態度だとも考えられるであろう。

その他、発音上、音便・訛りなどの東国的なものが指摘されるが、今的是を東国の源氏(本論では「北国(北陸)」も便宜上一括して記す)の方言に絞ろう。そうすると、一般にもよく言われているように、義仲はまずその筆頭にのぼつてよい。それが顕著に描かれるのは、先述の如く義仲が都へ入つてからである。その都風とはかけ離れた無教養さとかからみ合わせて、たとえば、

○猫殿のまれ(原由)おはいたるに、物よそへ。(流布本は「まればれわいたに」)

(巻八・「猫間」、明治書院本・P 456・有朋堂・P 370)

○いかで車であらむがらに、素通りをばすべき。(同「猫間」)——ただしこの「がら」は、裁判官知康(又は朝親)も使っている(巻八「裁判官」)。

○木曾対面して、先づ御返事を申さで、「抑わどのを裁判官といふは、よろづの人に打たれたうか、はられたうか。…(巻八・「裁判官」)——ただしこの「給たぶたう」は、文覚上人も使っている(巻五・「文覚被流」)し、地の文にも使っている。

…梶原にはする墨をこそたうだりけれ(巻九・生ずきの沙汰)。  
などある。これらすべては必ずしも「東国方言」となすべきものではないにせよ、義仲については頻度高く、やはり人柄を描写するための有力材料とされている。

大将の義仲がこうであるから、手勢の方は更に甚しかろうとも思われるが、物語中では義仲に代表されたか、手下についてはそれらしいものは見当らない。ただ、その北国における合戦の場に、特筆すべき方言描写がある。分類から言えば、先の「平家方の東国方言」に入れるべきであるが、論述の都合で、ここに述べる。

北国での義仲対平家の決戦は、もちろんくりに谷の戦である。義仲の戦略にままと乗せられ、潰滅的に敗れた平氏の残党のみ京に向つて敗走している。ただ、その殿になって、返し合わせ返し合わせ追撃の源氏と戦っている一武将がある。くりから谷・篠原でいかにもなるうものを、今までは只一騎での決戦の場がなかった、とも言うかのようなのである。彼は、先に伊豆で旗上げした頼朝の討伐にさし向けられ、若き総大将の前で東国源氏の解説をさせられた(先述)齋藤別当実盛である。あの富士川の敗走を恥ぢ、次の戦には死を期している。もと越前国の者ではあり、たま／＼北国の戦に臨む事は帰郷に当るからと、特に願つて「錦の直垂」を死装束として着込んでいる。保元の戦には源義朝勢であり、後平氏につき武蔵の長井の別当として居住した男である。嫡々の平氏でもない彼の名が本物語で一段の題名に採られている事を見ても、いかに重要視されている者がわかる。

これを討ち取つたのは義仲勢の手塚であるが、その有様を義仲の前で報告した中で、実盛のことばを「声は坂東声で候ひつる」と説

明しているのである。では、本物語中に具体的例徴があるか。それはある。即ち、実盛最後の戦いで、一早く彼に組みついた手塚の郎等に向って、

「あつばれ、おのれは日本一の剛の者にぐんでうずな（組みてんず+な）、うれ。」（岩波・大系本・下79-12）

と言っているのであり、ここに語頭濁音という顕著な特色があらわれている。

なお、一言しておくべき事は、今記した如く、実盛は当面の扈從の上では平氏方であるが、武人としての根性は源氏方・東国武士らしく描かれていることは彼が登場する数場面から明かである。その実盛が最も端的な「坂東声」の実例を示してくれているのは本論にとって貴重である。

ついで頼朝・義経側に移ろう。これらは義仲に対して教養ある武士として描く事と関係があらうと思われ、東国的な用語がない。ただし、その配下の兵には所々にその意図で使われたらしい方言色の語がある。

富士川の戦に臨む両軍が接近しつつある時、たま／＼常陸源氏佐竹太郎の雑色<sup>雑色</sup>が主の使いで都へ上る途次、平氏にとどめられ頼朝勢の数を問われる。その雑色の答に、

多いやらう、少いやらうをば知り候はず（巻五・「富士川」・大系本・上・P372）とあって、これは東国色を出そうとした表現であるとされる。<sup>註7</sup>

梶原源太の語（ただし独言）に、

この御きそく（気色）ではそれも詮なし（巻九・「生ずきの沙汰」・大系本・下・P167）

の発音も、その意図によるか。<sup>註8</sup>ただし類例は忠度の都落に際し俊成

卿への挨拶のことばに「そらく（粗略）」がある（大系本・下・P103）。一つ一つ見ると、疑わしい点が多い。しかし、源氏勢が活躍する場面には、総体的に、武者詞とすべきものをも合せて、京都ことばとは異った特色を出そうとしたらしい事が感じとられる例が多いのである。詳論を要しようが、今はさし措くことにする。

## 第二節「これは馬場や」の考察

ここにおいて本論の主題とする例に移る。次に示すのは「一の谷の坂落し」中の、平家物語でも最も著名な一節であるが、ここに方言にかかわる問題があると指摘されたのを見た事はない。しかし、結論的に言うると、作者（語り）の上で自然に出た事かも知れないが）は、方言語彙（発音）と一般的な語彙とを掛詞として用いたと解すれば、場面によく合致し、緊迫した中に一抹の滑稽味を漂わせる事にもなり、読んで味わい深いと思われるのである。今、日本古典文学大系本で示せば、

…小石まじりのすなごなれば、流れおとしに二町ばかりざつとおといて、壇なるところにひかへたり。それよりしもを見くだせば、大盤石の苔むしたるが、つるべおとしに十四五丈ぞくだつたる。兵どもここぞ最後とあきれてひかへたるところに、佐原十郎義連す、み出て申けるは、「三浦の方で我等は鳥ひとつ立てても、朝ゆふかやうの所をこそはせありけ。三浦の方の馬場や」とて、まっさきかけておとしければ、兵どもみな続いておとす。（巻九・「坂落」・大系本・下・P211）

とある。この傍線箇所は諸本によって若干の異同がある。主なものを摘記すれば、まず同じ「覚一本系」の山田孝雄校訂本（宝文館）は全く同一で、他を簡条的に示すと、

○鎌倉本―三浦の方の馬場や（古典研究会本P215下）本文「馬場乎」とあるが、同本「乎」は「や」に当る。

○葉子十行本―三浦の方の馬場よ（朝日古典全書・中巻・P206）

○百二十句本（慶大本）―是は馬場や（斯道文庫・汲古書院本・P536）

○平家正節―是は三浦のかたの馬場よ（京都大学本・三・一八〇〇頁）

○流布本―これは三浦の方の馬場ぞ（内海評釈本・明治書院P531・有朋堂文庫P434）

○八坂本―思へば是は三浦の方の馬場や（国民文庫本P414）

○百二十句本（京都府本）―おもへばこれはみうらのかたのばばよ（思文閣本P461）

の如くである。要点を指摘すると、最も簡単なのは百二十句本（慶大本）の、「是は馬場や」であり、他はすべて「三浦の方の（馬場）」となる。更に、「是は」と「三浦の方の」が重なって「是は三浦の方の（馬場）」となる。最も長いのは上に「思へば」がついている。文末助詞は「や・よ・ぞ」の三種に分れる。

その他、増補本側も参考したが、延慶本・長門本・南都本・盛衰記など、直接比較すべき文面ではないので省略する。

しかし、増補本系を含んで、いずれにせよ「一の谷の坂を『これは馬場だ』と決めつけて、自らの力を誇示しつつ友軍に力をつけた言葉」と解せられることは共通であり、そこに別段の問題はないかの如くである。

ところで、「天草版平家物語」と称される特異な一本がある。成立の事情・年代<sup>註9</sup>よりして、これにある言語事実を一般の平家物語に演繹して考えるのは注意を要することである。しかし、特殊な場合に参考になることもある。たとえば、平家物語巻一「祇王」の段で、祇

王の母のことに、

この世はかりの宿なれば、恥ぢても恥ぢても、何ならず。（流布本・明治書院本・P22）

とあるのは、このままでは明確な訳が立てにくいが、天草版平家物語では（翻字して示す）

この世は僅かの仮の宿りなれば、恥ぢても恥ぢいでもさせる事でもない。（P102/119）

とある事によって後の「恥ぢても」は「恥ぢでも」として解すべき事が明らかになる。これは岩波大系本の頭注にも記されている。

本論の場合は、これとは違うケースであるが、考察のヒントは天草版平家物語にあった。当箇所、同本では、

これは ばばか（原本はローマ字文）（P272/273）

となっていて、一般の平家物語（天草版平家物語）に対し、それ以外を総称してこう言う）に一つもない「ばばか」になっている点が問題である。ヘイケ（天草版平家物語をこう記す、以下同じ）では、一般の平家物語諸本中のいかなる本を底本とし、そのどんな表現を受けて「ばばか」としたものであろうか。一般の平家物語を一先ず平等に並べれば「や・よ・ぞ」の三種である。従って、ヘイケが直接底本にしたものも、このいずれかの終助詞を使っているものであることは疑いない。しかし、「や・よ・ぞ」のどれであるかは疑ってかからねばならない。諸本との比較からヘイケのほぼ後半は特に底本一つに依存する傾向が強く（逆にはほぼ前半は校訂的である）、およそ底本の見当もついている<sup>註10</sup>か、このような場合は一往白紙の状態<sup>註10</sup>で臨み、具体的な表現の方から考えて行くべきである。

具体的表現をおさえる上で注意すべき前提がある。それはヘイケ

を編集したキリシタンの方針で、「へイケ序」に当る端書に、この物語を力の及ぶ所は本書のことばを違えず書写し、…（「読誦の人に對して書す」の末尾）

とあり、それは殆ど実行されていると見てよい点である（中には抄約の都合その他で疑問視される言いかえもあるが）。

さて、前述の「や・よ・ぞ」のいずれかを「か」にしている点と、この根本方針とを比較すれば、「か」に変更しなければならぬ必然的な理由があると見るべきである。そこで明かにすべき事は、一般の平家物語の終助詞「や・よ・ぞ」が、へイケの当時（出版年は一五九二年）、特にへイケにおいてどう表現されているかである。

便宜上、比較的問題の少ないものから入る。まず、終助詞が、強意の「ぞ・よ」であるならば、一般の平家と天草版とでは別段用法の違いがない。「馬場ぞ・―よ」と同じく名詞についた例を中心に、同表現を並記すれば、

1 (義仲)「昔は聞いた事もあらうず、木曾の冠者。今は見るか、左馬頭朝日の將軍ぞ。一條の二郎とこそ聞け。討取つて勳賞蒙れ。汝がためにはよい敵ぞ。」というて割つて入らるれば、一條の二郎「只今名のるは大將軍ぞ。洩すな討取れというて、…（へイケ244-19-24）」

1' (義仲)「昔ハ聞ケン(物)木曾冠者今ハ見ラン左馬頭兼伊与前司朝日將軍源義仲ソヤ・一條次郎トコソキケ・打取り・勳賞蒙レ・汝カ為ニハ好敵ソトテ・破テ入・一條次郎・只今名乗ハ・大將軍ソ・漏スナ・討トレヤトテ…(百二十句本・慶大本・P 495)」

1'' (義仲)「昔はき、けん物を、木曾の冠者、今はみるらん、左馬頭兼伊預守、朝日の將軍源義仲ぞや。甲斐の一條次郎とこそ聞け。たがいによい敵ぞ。義仲うって兵衛佐に見せよや」とて、おめいてかく。一條次郎「

只今なるのは大將軍ぞ。あますなもの共、もらすな若党、うてや」とて…（岩波大系・下・P 178）」

2 「佐々木の四郎宇治川の先陣ぞ」と名のつて、…（へイケP 235-23）」

2' 「：佐々木四郎高綱、宇治河の先陣ぞや。」（岩波大系・下・P 170）」

3 先陣が「橋を引いたぞ。過ちすな」というたれども、…（へイケ・P 125-24）」

3' 先陣が、橋ヲ引タソ、誤チスナト云ケレトモ…（百二十句本・慶大本・P 276）」

3'' 先陣が「橋をひいたぞ、あやまちすな。橋をひいたぞ、あやまちすな」と、どよみけれ共…（岩波大系・上・P 309）」

4 義経「全く弓を惜しむではないぞ。伯父為朝が弓などならば、わざと浮めて見せよ」うずれども、厄弱たる弓を平家にとられて、これこそ源氏の大將の弓よ。強いぞ、弱いぞ、と嘲られよ」が口惜しければ、命にかえてとつたぞ」と、…（へイケ・P 338-13-18）」

4' 判官・全ク弓ヲ惜ニ非ス・伯父八郎為朝カ弓ナントナリセハ・態トモ浮ヘテ見スヘケレ共・厄弱タル弓ヲ・平家ニ取テ・是コソ源氏ノ大將ノ弓・強ソ弱ソト・嘲哂レンカ口惜ケレハ・命ニ替テ取ツカシト…（百二十句本・慶大本・P 652）」

5 蘇武は曠い野の中から這出て、「是こそ古えの蘇武よ」と名のつて、…（へイケ・P 70-2）」

5' 蘇武は曠野のなかよりは出で、「是こそいにしへの蘇武よ」とぞなる。（岩波大系本・上・P 207）」

6 童は見忘れたれども、俊寛はなぜに忘れようぞなれば、これこそ其よ」と言いもあえず、…（へイケ・P 86-14）」

6' 童見忘レタレトモ・俊寛ハ・何トテカ・見忘レ玉フヘキナレハ・我レコ

ソ其ヨト・云ハヤトハ思ヘトモ(百二十句本・慶大本・P 187)

6' 童は見忘たれ共、僧都は何とてか忘べきなれば、「是こそそよ」といひも

あへず、…(岩波大系本・上・P 234)

7 これ院宣よ、(ヘイケ・P 147-3)

7' クハ院宣ヨ、(百二十句本・慶大本・P 345)

7'' すは院宣よ、(岩波大系本・上・P 315)

8 (佐々木)「…既に曉立たうとての夜、便宜せいようて、盗みすまいて上るぞよ」と言うたれば、…(ヘイケ・P 233-1)

8' (佐々木)「…既ニ・立ントスル曉・立ントテノ夜・便宜ヨク・盗スマシテ・上ルソト云ケレハ(百二十句本・慶大本・P 482)」

このように、終助詞「ぞ・よ」は、一般の平家とヘイケとの間で、「(名詞に)後接して指定的に強意・詠歎する用法」については差別がない。よつてこの部分は本文が「ぞ・よ」であるならば、ヘイケにおいて「か」に替える理由がない。結果的に底本は「や」であつた事になる。

さて終助詞「や」の用法に移る。「是は馬場や」を例に考えれば、「や」は体言に後接し、その体言のもつ意味にこもる属性を指定的に詠歎している。ここでは「馬場のような容易な(属性)所だよ!」と解せられる。ところが、その用法ならば、ヘイケ中に幾つも用例がある。

1 あら、はしたなの女房の溝の越やうえ様や(P 109-11)

2 憎い君が申し様や(P 274-12)

3 さても剛の者の手本や(P 113-16)

4 むぎんの者の心や(P 386-10)

5 あら、恐ろしの源氏の陣の篝火や(P 152-21)

その性質上、状態性の意の語・形容詞などについていた例は特に多い。

6 いとおしや、今朝城の中に管絃させられたはこの君でこそござるらう

(P 277-17)

7 おん恋しや(P 290-8)

8 さても不思議や(P 67-10)

従つてこの「属性の指定的詠歎」ならば、これまた「か」に変更すべき理由がない。

では、ヘイケの「これはババか」は底本の「ババや」を「馬場のような容易な所だよ」とは異つた意味に受取つて「ババか」としてゐるのではないか。まず「や」のもう一つの意味をとりあげなければならぬ。それは「疑問(広義)」の意味である。

ところが、ヘイケで、「や」を疑問(狭義、又は純疑問とでも言うべき)に用いたのは、

9 我なれや思おもひにもゆる富士ふじの嶺たねの、空しき空の煙ばかりは、(和歌—ヘイケ・P 361-5)

10 八万の諸天に圍繞せられようもかくや(アラン)とこそ覚えてござつたが、(ヘイケ・P 400-12)

11 また一の谷とかやの軍に負けて、…(ヘイケ・P 400-17)のような形にはまった少数例があるだけで(疑問の係りの用法は多いが)、「これは馬場や」に類する例はない。従つて、ヘイケでは疑問(広義)の意であると共に「や」そのものではない語が選ばれることになる。即ち、「や」の持っている(広義の)疑問の意味をヘイケにおいて表し得る語として「か」が選ばれたと思われるのである。次にヘイケと、その底本として可能性が高いと思われる「百二十句本(慶大本)・覚一本(岩波、日本古典文学大系本)」とを対比



して、広義の疑問表現が、「や」から「か」に移った(訳された)点を明かにする。「や・か」共に終助詞であるものに限って例示する。

- 1 度々の事なれども、御辺またお向いあらうか(ヘイケ・P 256-22)
- 1' 度々ノ事ニテ候ヘトモ・御辺・又・向ハセ玉ヒナンヤ(百・慶・P 517-2)
- 1' たび〳〵の事で候へども、御へんむかはれ候なんや(覚・岩・下・P 195-13) —— 以上、婉曲に意向をたずねる用法。

- 2 太政大臣の官にいたる人の甲冑を鎧うこと、礼儀をそむくではごさないか(ヘイケ・P 45-12)

- 2' 太政大臣ノ官ニ至ル程ノ人ノ甲冑ヲ鎧ヒマシマサン事・礼儀ヲ背ニ非スヤ(百・慶・P 114-7)

- 2'' 太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふ事、礼儀を背にあらざや(岩・大系・上・P 172-5)
- 以上、疑問の強叙で詰問とも反語とも言えるもの。

- 3 この事を行綱が知らせずは、清盛安穩にあらうか(ヘ・P 23-18)

- 3' この事行綱しらせずは、浄海安穩に有べしや(岩・大系・上・P 153-3)
- 以上、反語と言うべきもの。

- 4 兄を討たせて証拠に立たうと申さうずるに、弓矢とる法によいと申さうずるか(ヘ・P 268-10)

- 4' 兄ヲ討セテ証拠ニ立ント申スルニ・弓矢トル法ニ・能シト云候ナンヤ(百・慶・P 530-9)
- 本例も反語表現。

- 5 敵四方を囲みまらしたれば、いづくよりもれさせられようか(ヘ・P 385-2)

- 5' 敵・四方囲ミ候・焉ヨリ漏玉フヘキヤ(百・慶・P 751-1)
- 同じく反語。

このように、一般の平家物語(底本)で「や」とあるものを、ヘイケで「か」とした例があり(右に示したのは、その一部)、前述の目的は達せられた。しかし、この中に当面の例と一致する「名詞に直接したか」が入っていない。別にこれを求めると、前述の「やか」の対応より「かか」(つまり一般の平家物語も「か」であるもの)が目立ち、その意味も多くは「反語」である。

- 1 男の心は川の瀬の刹那に変わる習いか(ヘ・P 308-21)

- 1' 夫ノ心ハ河ノ瀬ノ・刹那ニ替ル習カヤ(百・慶・P 596-11)

—— 遲疑的であり、「今気づいた」意。

- 2 たとい命を召さるるとも、惜しまうずる我身か(ヘ・P 99-16)

- 2' たとい命をめさるるとも、惜しかるべき又我身かは(岩・大系・上・P 100-8)

- 3 一条の次郎殿の手でばかり軍をすることか(ヘ・P 250-3)

- 3' 一条ノ次郎殿ノ手ニテ計・軍ヲハスル事カ(百・慶・P 501-9)

- 3' あながち一条次郎殿の手でいくさをばするか(岩・大系・下・P 183-1)

- 4 汝に合うては名のるまい、ただ今名のらねばとて、かくれあらう者か(ヘ・P 277-2)

- 4' 汝ニ合テハ名乗マシキノ・只今名乗ネバトテ・終隠レ有ヘキ物カハ(百・慶・P 549-2)
- 以上、2以下は皆、反語表現である。

第三節 「これはババヤ」は反語から出発する

前節によって、底本を含むと考えられる一般の平家で「馬場や」であるものを、ヘイケでは「ババカ」としてあり、その場合の意味は広義の疑問である事が明かとなった。

ところで、ヘイケの「ババか」において、「ババ」を「馬場」と解し、「か」を普通の疑問と解するとうなるか。

これは(三浦の方)馬場だろうか?

となり、「一」の谷の坂を物ともせぬ気概などは全く感じられない、場面にふさわしからざる意味になりおこせる。

実は今「一般の平家の『馬場や』を疑問に解する限り『か』とせざるを得ない」と考えた事に、一つの問題が残っている。即ち、諸本中には終助詞が「よ・ぞ」とあるとおり、これは疑問でなく強叙なのではないかという点である。整理してみると、ヘイケで「一か」とある以上、ヘイケは広義の疑問の範囲で解せざるを得なくなり、そうすれば「馬場か?」は意味をなさなくなり、むしろ「馬場よ・一ぞ」と同じく強叙にとれば理解される事がわかってくる。ところが、そう考えたとヘイケで、その「よ・ぞ」を「か」と訳す必然性がない、という袋小路に行き詰るのである。

強叙か疑問か? これを超克する方法が一つだけある。それは前節における用例の検討の中にもヒントがあるが、この「や・か」を(特にヘイケの「か」は)疑問の強叙たる反語として解することである。そうすれば結果として肯定の強叙に落つくことになり、すべて矛盾なく解しうる事になるからである。

さて、その解が成り立つために一つ問題が浮び上がる。即ち「これはババか? いやババではない」と解するためには、ババがどんな意味でなければならぬかという事である。とりもなおさず「馬場」というものの一般的な属性と対比してみることになる。

「馬場」とは、一般に「乗馬の練習・騎馬・武芸の修練競技・馬の調教等のために設定した(走)路」であり、多少の起伏はあつて

も大体平坦な所である。さて平家物語で、三浦の佐原十郎義連は、この坂を「馬場」に見なしたが、事實は、

三十丈の谷、十五丈の岩さきき……(土地の獵師の言、巻九・老馬・岩波本・下・P198)

大盤石の苦むしたるが、つるべおとしに十四五丈ぞくだつたる(前節に引用)である。そうすれば、義連は、この急峻を心理的・内面的に否定したことになる。たとえ眼前にあるものは目も眩まんばかりの急坂でも、それを否認してかかったのが彼の心意気である。ところが、表現の上には、あくまで「馬場や」とあり、この「急坂を否認した心理」は顕在的なものとしてはとらえられない。では、顕在化しない意味での「ババ」は何であろうか(顕在化したのは文字どおり「馬場」である)。それは「ババ」から直接にも理解する事ができるが、筆者の辿った過程で述べよう。

#### 第四節 ババは崖と馬場の掛詞

ここにただ一つ、重要な手がかりがある。

岩波、日本古典文学大系本頭注(校異)に本箇所「高良神社本のみ馬場に『はば』とふりがながある」と説明されている。これは貴重な事実である。

「馬場」には大別して

うまば

はば

の二つの場合がある。尤も「うまのには」ともよみ得、語源的には「には↓ば」だが、今それに触れる要はない。ところで、高良神社本のふりがなは、「うまば」でない事を示しているのは当然としても、

なぜ「馬」に「は」と振ったのであろうか。わが古典に一般的なおおり、同神社本の濁点符も必ずしも一貫した方針はないようにみえる。それにしても、下の「は」には濁音符をつけながら、上を略した事に積極的な理由があろうか。言われるとおおり、同本のふりがなには問題な表記もあろう。しかし、それ故にこのふりがなも単なる誤りとしてしまうのは、余りに惜しい。

「はば・はんば」とは、「岨」の字があてられて、「崖」の意がある。それより音が転じて「はま・まま」とも言われる。更に語頭が濁音となつて「ばば」とも言われる。即ち、先に示した実盛の坂東声「組んでうず」と一致する特色があらわれたものである。

今ここに諸辞書等を詳細に引用する紙数がない。最も端的に解説しているものを示すと、

「はば〔岨〕方言、傾斜地。土手などの斜面。がけ。群馬県多野郡・山梨県南巨摩郡・信濃・長野県・岐阜県大野郡

(日本国語大辞典・小学館)

ハバ 崖〔羽場・羽波・羽馬札・羽計・幅・幅野・葉場・端場・端・山・掬〕

ババ (1)崖(ハマ・ハバ・ママと同様)(後二者は「地名の語源」鏡味完二・

鏡味明克―角川小辞典)

の如くである。これによつて、強ち高良神社本の如く「はば」としなくても(「ばば」のままでも)当箇所は「崖・馬場」二つの意味に解しうる。そこで先述した「掛詞」が成立するのである。

これはババ(崖)だろうか。いやババ(崖)ではない―崖など言うに値しない。これはババ(馬場)なのだ!

結局、文末の助詞は、「まず疑問であり、かつ強叙になる語」で、本来的にはやはり「や」であるべきだという事になる。「―よ―ぞ」

では、右の掛詞は成立しない。

ここで、ヘイケのみに限つて言えば、当のヘイケ・イソポ註などで文末の「―か」が単なる強叙(詠歎)に用いられていない点よりして直接「馬場だ!」の意は浮んで来ない。従つて「崖か? 否(崖ではない)」の範囲にあてて解すべきである。それに対比して言えば、一般の平家物語は「崖か? 否」の部分は隠されて、結果としての「馬場だ」の方のみ明瞭に表現されている。この点、両者は対蹠的である。

一般の平家で「馬場」と漢字をあてた以上、文字とおりに解して別段問題はない。ただ、まっすぐにそう述べるより、眼前に目も眩む急峻を置きながら「これは崖ではない。崖と言うに値しない」と先ず言つておいて「これは日ごろ走り馴れている馬場だ。」と言つたとする方が、場面と、佐原十郎義連の心理に、よく合うと思われるのである。

#### 第五節 簡潔な表現と滑稽味

掛詞は同音異義語(単に語同志の対応ばかりでないが)の応用である事は今更言うに及ばないが、本例について私見の如く解した場合は、単に意味が二重に解されるばかりでなく、同音異義の片方を否定して今一方を強叙するという形になる。即ち、一往意味を除いて受けとると、

ババではない。ババだ。

となり、論理の上では矛盾となる。それに気づいて「あ『崖』ではない。馬場だ」の意味だ」と悟らされる、そして改めて、おかしさが湧いてくるという次第である。

掛詞・同音異義を応用した滑稽の描出は、平家物語中に数例指摘できる。代表例を一つ示すと、頼朝討伐に向いながら、なす所なく逃げた平氏を嘲った落書に、

平家 宗盛  
ひらやなるむねもりいかにさわぐらん  
平屋 棟漏

はしらとたのむ 亮 すけをおとして (巻五・五節之沙汰)  
極(支)

とある。また、緊迫した合戦の場に滑稽をさし挟んだ例としては、宇治川先陣争いの時、騎馬武士は疾うに渡ってから、偶然主人に助けられて「歩兵」一番のりができた男の話で、

「武蔵国の住人大串次郎重親、宇治河(かちちち)の先陣ぞや」とぞ名のつたる。敵も御方もこれをきいて、一度にどつとぞわらひける。(巻九・宇治川先陣)

などあり、能に対する狂言の効果を思わせる。

さて、そういう技巧を秘めながらも、この切迫した場面に、長たらしい表現ではいけない。その要求によく合致して、或意味では無意識にしゃべったら、たま／＼そういう滑稽を含んだ表現になっていたとしても言うような、簡潔の極の表現である。これが名作である所以であろう、と筆者は感ずるものである。

## 結 語

今まで述べた如く、一般の平家物語では「崖ではない」の部分を言外に理解すべきものとして顕在化するのを避け、まっすぐに「馬場や(―よ・―ぞ)」と宛字までして表記した。結果としてその意味でよい事は先述したとおりである。しかし、平家物語を理解するに

当って大事なものは「表記された文字の意味より、発音によって示される意味に即して」解する事である。「たりふし」を「折節をりふし」とするのは誤であることなど、夙に山田孝雄博士の説かれた所である。<sup>註15</sup> 本例の場合、発音を精査しても同音なので些か筋は異なるが、既存の本文の表記文字に依存しては、必ずしも正確な解釈は得られない、という点では同一である。「はば」の振仮名が重要な所以である。特に本例の場合「馬場」とされてしまう理由がある。それは、一の谷に向う山中で、土地の獵師に義経が地勢を尋ねる話があり、義経一流の論理で、

さては馬場馬ごさむなれ。鹿のかよはう所を馬のかよはぬ様やある(巻九・老馬)

と言っている。坂落の段は、この義経のことばを受けて、引用したと解しても悪くないのである。

もう一つ「馬場」に引きつけられるのは、「岨・崖」を「ババ・ハバ」と言うのが、大体東国の方言である点である。厳密に言えば、当然、当時の方言として実証すべきである、という問題は残っている。<sup>註16</sup> しかし、とにかく本文中に「坂東声」として指摘されているのと同じ語頭濁音語が、現在ハバ・ババを使う地域に近い東国勢に使われた事は重要視してよい。或いは崖ババが東国語であるために、西国の語り手・本文書写者に正確に理解されなかつたとさえ言えるかも知れない。

ヘイケの「これはババか」のローマ字綴りを見つめて、その表現に疑問を感じて久しい。それが、この様な形で、自分なりの解決が得られるとは予想だにしなかつた。ここに、本論中には述べなかつた、もう一つの偶然的過程について明しておく。

近年になって立場上も方言研究を手がけねばならなくなって、県内を歩き、地名にも注意せざるを得なくなった。男鹿半島あたりから県北部にかけて「ハダチ(羽立)」という地名が多い。それは本論とは無関係であるが「羽立」のそばに「ハネ(羽・跳・)」などが目につき、それが川筋である点から川を見て行くうちに「馬場目川」を見つけた。「何でこんな所に馬場が?」と思いつつ遡行したら、源は太平山系の「馬場目岳」だ。「いよいよ馬場の一般的意味とは違ふ。発音はババでも、意味は別だ」と思わざるを得なかった。その時ヘイケの「これはババか」を想起したのである事は説明の要もないと思う。

馬場目岳は、それ程崖ふちの多い切り立った山でもない。しかし、この馬場目川の流れ出る側(北側)は、五万分の一の地図で見ても、太平山系の中では切り立っている事がわかる。

この山が身近にあり、「馬場だろうか?」の意では通用しない天草版平家物語を見つめていた筆者にとつて、本論は必然的な課題であったように思える。

終りに、思いがけぬ発見に喜ぶあまり、幾多先学の説に対し、非礼な点があるう事を謹んでおわび申し上げるものである。

注1平家物語略解(御橋惠言)、解釈と文法・五巻・P62(山田俊雄)

注2全国方言辞典(東条操)、注3と共に岩波大系本下巻補注に紹介あり。

注3これが、ハバ・ババ(岨)を使う地域とはば重なる点に、特に注意される。

作者(語り手)が、この地域の方言を知りうる特殊な事情があるか。その点、「信濃前司行長」説(徒然草・平家物語考―山田孝雄)は有意義に思わ

れる。

注4口語法調査報告書(国語調査委員会)等。

注5日本古典文学大系解説。

注6巻七、「実盛」。なお実盛の子息、齋藤五・齋藤六の二人は平維盛に仕えた。一門が都落する時、維盛は妻子を同行しなかったが、嫡々の正統の子である「六代」の後事をこの二人に託し、事実二人は六代に忠を尽している。実盛父子に対する特別な目があるようである。

注7日本古典文学大系・上・P372・頭注二。

注8地の文にもあり、必ずしも東国方言とは言えない。

注9ポルトガル人宣教師が中心になって、日本の歴史・言語を習得する手だてとしたローマ字文のもの。一般の平家より約四〇〇年遅い、二五九二年刊。抄であると共に、当代の口語体に訳されている。

注10組織上百二十句本に近いことは、早く山田孝雄博士「平家物語考」(明治44年)に説かれている。「ハビヤン抄キリシタン版平家物語」阪田雪子氏(吉川弘文館)にも、具体的な比較から、同様の結果が出る事が述べられているが、筆者の調査では、前半と後半で若干異なり(本論)、後半が特に百二十句(慶大)本に密接している。本論の箇所は後半の中に入っている。

注11原本ローマ字綴りからは「やう」の音、即ち「合・逢」の類に当るが、百二十句(慶大)本のヨクに従う。

注12日本古典文学大系、解説。

注13いわゆる「天草版伊曾保物語」を略称。ヘイケの姉妹篇で、一五九三年刊。さて、本書と「抄物」の語法において、終助詞「か」は、疑い・問い・詰問・反語・並列などに用いているが、単なる強叙(詠歎)に用いた例は指摘されていない。「天草版伊曾保物語の研究」拙者(風間書房)、「室町時代言語の研究」湯沢幸吉郎博士(風間書房)。

注14 狂言・狂歌等より漫才に到るまで、滑稽の材料とされている。

注15 「平家物語（覚一別本）」における「平家物語概説」P 28（宝文館）

注16 物類称呼・倭名類聚抄郷名・節用集・片言その他国語学大系所収の方言資料等によっても、手がかりはない。

## 〔補注〕

「ババ」の類似形態の語・地名を摘記しておく。

- 1 ババダニ（祖母谷温泉）―富山県黒部川の谿谷にある。
- 2 ハバツカケ―傾斜断層地―山梨県。
- 3 ハンプカケ―端、断崖―秋田県。

4 ハブ（宛字は数種あるが）典型的な場所を一つあげると、「土生」―広島県御調郡因の島南部、狭い海峡地帯。

この外「ハブチ―海岸部の浅・深の境（静岡県）」も関係ありや。また、一の谷が、「小石まじりのすなご……」と記されている（本論）点からは「ハバラ―小石混りの地質（熊本県南関）」も考慮すべきか。

以上、「大辞典（平凡社）」「秋田方言（秋田県学務課（国書刊行会）」による。

## 〔補遺〕

- 1 ヘイケに西国方言の要素がある点から、「これは馬場か」も「アホか」（馬鹿なこと）などにあてることができれば、疑問の要素のない強意・詠歎だが、この話者が三浦半島出身である事と、同例がイソポ・ヘイケにない点から、採らない。

2 「越中前司盛俊・越中次郎兵衛盛嗣」らが、どれほど任国方言の影響を受けたかなど全く知る由もないが、作者の側から、方言的に表現することとはあり得る。

（一九八〇年九月十日受理）